



# 新しい福光農業 「地域一農場化」をめざして (下)

ゲスト／幅田浩司(富山県JA福光 代表理事組合長)

## 第31回ゲスト

富山県JA福光 代表理事組合長  
**幅田浩司**



はばた・こうじ  
1957年生まれ。1980年富山大学を卒業後、福光農業協同組合に入組。2012年に監査部長、管理室長兼総務部長を経て、2015年に同JAの理事に就任。2021年代表理事組合長に選任され、現在に至る。

## ●インタビューとまとめ

三重大学名誉教授  
京都大学学術情報メディアセンター研究員  
**石田正昭**



いしだ・まさあき  
1948年生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程満期退学。農学博士。専門は地域農業論、協同組合論。元・日本協同組合学会会長。三重大学、龍谷大学の教授を経て、現職。近刊書に『JA女性組織の未来 躍動へのグランドデザイン』『いのち・地域を未来につなぐ これからの協同組合間連携』(ともに編著、家の光協会刊)。

\* 前回の記事は[コチラ](#)から

## 新しい福光農業「地域一農場化」をめざして(下)

農協はだれのものか——いうまでもなく組合員のものである。しかし、それを実感できるのは、総代とか組合員組織の意欲的な構成員にならないかぎり少ないのではないか。そうしたなかでJA福光は集落営農や地区センターの将来的なあり方について組合員たちに問いかけを続けている。今回は、組合員が主人公のJAの姿を幅田組合長に語ってもらった。

### ■集落営農組織でのスムーズな世代交代

**石田**：カントリーエレベーターの利用を中心とした「福光農協一農場化」もさらに進化を遂げているようですね。

**幅田**：担い手不足、高齢化が一段と進行して、集落営農組織のなかでもやっていけないところが出てきています。どの地区も似たような状況ですが、担い手の中心的存在である団塊の世代が2025年には全員後期高齢者となってしまうので、その後のことを考えなければなりません。でも正直に言って、なかにはあまり将来のことを考えたくないという人もいます。

**石田**：わたしも団塊の世代ですが、まだまだ働けるという意識をもっていますからね。息子たちにどうつないでいくか、そこがポイントです。

**幅田**：家族サイクルを30年と考えると、団塊の世代の息子たちは現在45歳前後です。会社でバリバリ働いている年ごろです。定年が伸びているので、退職まで20年くらい残っています。そこまで団塊の世代が元気に働けるかという点、そうではありません。

わが在所の高宮営農組合は1998年の創立ですが(2015年農事組合法人設立)、わが組合ではスムーズな世代交代を考えて、創立当初から息子たちをトラクターやコンバインに乗せてきました。ですから、次世代のオペレーターが着実に育っています。

**石田**：そうですね。機械作業は若い人に任せるほうがいいですね。

**幅田**：高宮のような営農組合もありますが、息子たちにはやらせずに自分たちでやっている営農組合や、あんまり若い人にやらすと機械を壊すから、慣れた人だけでやろうとする営農組合など、いろいろです。

率直に言って大型機械は若い人に任せるほうがいい。問題は、勘と経験が必要な水管理です。作期分散や高温対策の必要から水管理はより複雑なものとなっています。そこで役立っているのがスマホによる水管理です。わたしもこれを使って便利にしています。

わが家の場合、二枚の田んぼはすでに稲刈りが終わっていて水を張っていませんが、もう一枚残っています。(スマホの画面を筆者にみせながら)この田んぼ

はいま3.8センチ。これって、15分ごとにスマホに入ってきます。高宮地区ではわたしだけが試験的に始めました。実際にやってみないと、そのよさが分かりませんからね。スマホで水門を開けたり閉めたりする装置もありますし、セットすれば自動的に水位を一定に保ってくれる装置もあります。

水管理については、JAからの営農指導で、浅水で2センチにしなさいとか、深水で5センチにしなさいとかの連絡が入ります。でも水の深さは田んぼをみてもよく分からない。ですが、スマホに数字で3.8センチと出てくれば、経験のない人でも簡単に分かるようになります。



JA福光では、出穂から20日間の最も水を必要とする時期に、2～3センチの水張り（湛水管理）をお願いしていますが、お風呂みたいに自動の水張り装置をつけていれば、その20日間何もしなくても済むようになります。ですから、若い人には大型機械に乗るだけではなく、こうした便利な装置を入れて、勘と経験に頼らない水管理を体感してほしいと思います。

**石田**：お値段はどのくらいですか？

**幅田**：水位センサーで2万円くらい、自動水張り装置で4万円くらい、合計で田んぼ1枚に6万円かかります。安いようにみえますが、10枚の田んぼがあれば60万円になります。なので営農組合が所有して、メンバーに貸し出している地区もあります。

**石田**：それはいい話ですね。

**幅田**：ただ全部の田んぼに入れなければならないというものではありません。家のすぐ目の前にある田んぼに入れる必要はありません。家から遠いところだけでいいのです。

## ■「地域一農場化」の目標

**幅田**：「福光農協一農場化」の後継対策として、現在取り組んでいるのが新しい福光農協「地域一農場化」です。



「地域一農場化」の第1の目標は、農業機械の自動走行化やドローン化、施肥・追肥量の精密化、さらにはいまお話ししたような自動水管理システムの導入などいわゆるスマート農業を展開して、これまで10人でやっていたものを2、3人でやれるようにしていくことです。その大前提にはほ場の再整備、大区画化があって、それと歩調を合わせていくことが現実的です。普及促進のための実証プロジェクトをJA主導で進めているところです。

第2の目標は、特色ある商品づくりと需要に応じた生産体制の確立を図ることです。高収益作物の導入については、機械化一貫体系が確立しているにんじんの生産拡大に取り組んでいます。1億円産地づくり品目については、これまでも取り組んできましたが、ブロッコリー、アスパラガスの生産拡大に取り組んでいます。これらの共販野菜については、有機物の補給、土壌養分の補給、排水対策などをきっちり行って品質向上に努めるとともに、GAP（農業生産工程管理）を導入して消費者の安全・安心志向に応えるようにしています。

一方、特色ある商品づくりについては、南砺市内（福光・城端）で生産される大型の三社柿を原料とする「干柿」に加えて、新たに「あんぽ柿」の生産拡大に取り組んでいます。2021年、わが在所の高宮地区にある農事組合法人・富山干柿出荷組合連合会が「あんぽ柿共同加工センター」（総工費4億7,000万円）を設置し、「干柿」「あんぽ柿」とドライフルーツ状の「柿ごのみ」や干柿で柚子をくるんだ「柿娘」を生産しています。「干柿」「あんぽ柿」は台湾やカナダにも輸出しています。



海外へも輸出されている「あんぽ柿」（左）とドライフルーツ状で食べやすい「柿ごのみ」（中央）、干柿で柚子をくるんでいる「柿娘」（右）

**石田：**そうだったんですか。じつは昨日の到着時、旅館のおかみさんのお点前でお抹茶と薄切りにした「柿娘」をいただきました。京風というか、スマートな「おもてなし」で感激しました。

**幅田：**第3の目標は、コシヒカリ、酒米、もち米を中心とする良質米生産体制を堅持することです。

管内の水田面積はおよそ2,500ヘクタールですが、そのうち水稻が約2,000ヘクタール、麦・大豆等の畑転作が約500ヘクタールとなっています。水稻

2,000ヘクタールのうち、主食用米が約1,500ヘクタール、非主食用米(加工用米、新規需要米、備蓄米)が約500ヘクタールです。作期分散を進めていて、その生産割合は早生(てんたかく、五百万石、とみちから)が3割、中生(コシヒカリ)が4割、晩生(てんこもり)が3割となっています。主食用米のほとんどは中堅卸売業者と大手中食・外食事業者に出荷しています。

本当はまだ需要があって取引先からはもっと欲しいといわれていますが、決められた生産目標(数量・面積)のなかで対応しきれいていません。行き先が決まっているので残念です。

需要があるという点では、酒米、もち米も同じです。もともと富山県内の酒米産地は南砺市内(J A福光・J Aなんと)に限られていますので、蔵元の需要に応じきれいていません。また、もち米は県内の米菓会社や千葉の卸売業者を通じて有名食品メーカーにも送られていて、個包装のパックもちや大福もちなどに使われています。

全量がライスコンビナートからの出荷なので、均質性があり、量がまとまっているというありがたい評価をユーザーからいただいています。同時に、一等米比率についても、営農組織の協力のもと県内でトップクラスにあります。ここ10年間の実績をみると、2018年を除いて毎年95%以上を達成しており、そのうちの3年は99%台に乗せています。

栽培技術の向上をめざして、毎年『ふくみつ 営農とくらし』(200ページ超の分厚い冊子)を農家に配布するとともに、営農指導員が集落に出向いて座談会を開いたり、田まわりを行って管理の統一を図っているところです。なかでも先ほど述べた出穂後20日間の湛水管理が重要で、猛暑が続く今年の場合どうなるか、ちょっと心配しているところです。

**石田**：想定を超える暑さなので本当に心配ですね。

**幅田**：第4の目標は、「福光農業」が永続的に発展できるような体制をつくることです。



福光地域営農組織・認定農業者一覧(令和4年2月末現在)

NO.	組織形態	組織数	構成員数	経営規模	農地集積状況
1	全面協業営農組織	23	415	476.4ha	19.1%
2	農事組合法人・有限会社	33	896	1,311.2ha	52.7%
3	認定農業者(個人)	29	29	269.0ha	10.8%
4	転作協業営農組織	9	475	171.1ha	6.9%
合計		94	1815	2,227.7ha	89.5%
総水田面積				2,488.2ha	

管内農用地の90%以上が水田で、集落営農組織の経営シェアも8割となっています。表の「福光地域営農組織・認定農業者一覧」が示すように、管内には94営農組織・認定農業者があって、その内訳は任意の全面協業営農組織が23、法人の営農組織が33、認定農業者が29、任意の転作協業営農組織が9という構成です。認定農業者を除く営農組織の経営面積を合計すると、農地集積状況は78.7%となります。

これらの営農組織がそのまま存続することが、望ましい姿だとは考えていません。現在、小矢部川の西側と東側で基盤整備(大区画整備)が順次進められていますが、基盤整備を起点としてスマート農業を展開するとともに、いくつかの営農組織が合併して、効率的で効果的な集落営農を展開していくことが持続的な発展につながると考えています。

たとえば、小矢部川西側の小坂地区、ここは常務理事の冨澤年司氏の地元ですが、大区画整備の進行に合わせてスマート農業に先進的に取り組んでもらっています。同時に、2022年11月に小坂営農組合(2008年設立)、(農法)小坂第一協業(1999年設立)、小坂転作組合(1995年設立)の3組織が合併して(農法)イノベーション小坂を立ち上げました。

また、石黒地区においても2019年1月に(農法)くわやま営農、松木営農組合、中ノ江営農組合、法林寺営農組合の4組織が合併して(農法)石黒営農を立ち上げました。

自発的な取り組みとして、こうした動きがその他の地区にも広がることを期待しています。

## ■ どうする地区センター

**石田**：広報誌『JAふくみつファースト』2022年7月号に総代会「事前説明会での主な質問やご意見など」が掲載されていますが、そのなかで「地区センターについて今後の取り壊し予定は？」という質問が出ていました。



2023年5月に開催した第58回通常総代会では、活発な質疑応答もおこなわれた



**幅田：**わがJAでは旧支所・支店のことを「地区センター」と呼んでいますが、この質問は、その地区センターを今後どのように利活用するのかを問いただそうとするものです。金融店舗の整理・統合を進めている全国のJAにとって、避けて通れない問題です。

2000年に現在のJA福光が誕生しましたが、そのときは本所と11の支所・支店がありました。この体制をずっと維持してきましたが、2007年ころに金融機関として常時4人以上の常駐職員を置きなさいというJAバンクからの指示があって、それを機に支所・支店で行う金融業務をここ福光中央会館の本所に集約しました。支所・支店をいくつ置くか、どこに置くか、についてはさまざまな議論が出たのですが、いちばん落ち着きがいいという理由からこの形が選ばれたのです。

支所・支店の金融業務を本所に集約したことで、旧支所・支店の建物はどうするのかという話になって、名称を地区センターに変更して地区組合員のよりどころとして活用することが決まりました。

この方針に従って、当初は地区センター長、営農指導員、女性職員の3人体制でスタートしたのですが、営農指導員を「アグリフロンティアセンター」内の営農部に集結させたことをきっかけにこの体制を維持することがむずかしくなり、最終的には地区センターの建物はそのまま残して、女性職員の配置転換を進めるとともに地区センター長を本所に集結させることになったのです。つい2、3年前のことです。

**石田：**現在は地区センターの建物はあるけれども、そこに職員は一人もいない。用事があるときは本所3階の地区センター長に会いに来てくださいねということですね。

**幅田：**そのとおりですが、地区センター長には業務用携帯電話を持たせ、その携帯番号も広報誌で公表しているので、電話で連絡を取り合ってから会うことになります。しかし、金融相談だけであれば直接1階の金融店舗へ行ったほうが話は早い。そのことで地区センター長と会う必要はありません。本所はJR福光駅前の便利なところであって、人の流れは完全に1階に移ってしまいました。

地区の方々が地区センター長に会おうとすれば、電話で連絡を取り合ってから地区センターで会うことになります。しかし、そのような機会もそんなに多くはありません。

**石田：**お年寄りたちが仲間と談笑するために地区センターに集まることはないのですか。いわゆる「コミュニティカフェ」としての活用ですが、こうした活用があってもいいのではないのでしょうか。

**幅田：**もちろんいいです。しかし、地区のみなさんが集まればいいのですが、実際はそうはならない。すぐ近くの2、3人だけが集まるような状況になってしま

います。

**石田**：協活とか、生産調整とか、金融や購買の推進など、地区センター長の業務は結構多いかと思います。また、建物は女性部や助けあい組織の活動拠点としても利用できるのではないのでしょうか。

**幅田**：そのとおりですが、近くには地区の「交流センター」(公民館)があって、その管理も行き届いているので、女性部や助けあい組織はそちらを利用することが多くなっています。

かといって、地区センター長職を廃するとか、ただちに建物を取り壊すとかは、まったく考えていません。地区の社会的、経済的、文化的なシンボルとしての意味があるからです。いうならば、地区という単位があってはじめて、集落と全体(市・JA)との橋渡しができるようになるからです。

**石田**：利用が低調だと減損対象になるのでは？

**幅田**：すでに減損はしてあります。一部、書庫(北山田・山田地区)とか、簡易郵便局(東太美・南蟹谷地区)とかに利用されている地区を除いてですが。

いずれにしても、地区センターはもとはといえば地区の持ち物、もっと言うと戦後農協が設立されたときの単位農協の持ち物、地元の組合員のみなさんたちの持ち物ですから、本所サイドが勝手に判断を下すわけにはいきません。地元の方々がどうするかをしっかりと考えて、提案していただきたいというのが基本です。

## カントリーのお店「う米蔵」

カントリーエレベーターや低温倉庫、麦等大規模乾燥施設などがある「ライスコンビナート」、営農部の事務室や集会施設がある「アグリフロンティアセンター」、資材倉庫や農機具点検整備工場、アグリ配送センターなどがある「資材物流関係施設」は、一か所に集約されている。管内のどこからも最大15分で到着できるような交通至便な場所にある。

その一角に、カントリーのお店「う米蔵」がある。ここにはサイロでもみ保管された自家保有米を、必要なときに必要なだけ引き出せる「お米引出し機」が設置されている。この引出し機を「うまいっちゃん」と



「う米蔵」のロゴは直売所の看板にも使用されている



呼び、銀行カードのような「うまいっこカード」を使って、新米同様の  
お米を簡単に引き出すことができる。保管料は無料で、精米料は  
10kg100円である。

自家で保有すれば食味は落ちるが、「う米蔵」を利用すればサイロか  
らの蔵出米をいつでも食べることができ、自宅に保管する手間と機械も  
いらなくなる。一方、カントリーを運営するJA側としても、収穫時、  
一度に大量の自家保有米の袋詰めと配達をする手間が省けるとい  
うメリットもある。

生産農家だけではない。一般消費者も「うまいっこ倶楽部」に加入す  
れば「うまいっこカード」が取得できて、おいしい蔵出米を食べること  
ができる。「う米蔵」ではお米のほかに野菜や干柿、地酒などの地域特  
産物も販売しているので、直売所の役割も果たしている。



お米引き出し機「うまいっこちゃん」  
に精米施設利用者カードを挿入する  
と、お米を引き出せる仕組み



実際に米を引き出してくださった  
営農部 川合部長